

一般受験について知ろう！！

4 月の LHR・総合では「**大学入試〇×クイズ**」を実施し、「Fly High 23 号」では解答編を取り上げました。

今号は、受験の仕組みについて復習していきます。

PART 1 国公立大学 一般受験の仕組み

大学入試〇×クイズよ！

Q3 センター試験は 1 月に実施されるが、出願は 10 月である。 → (○)

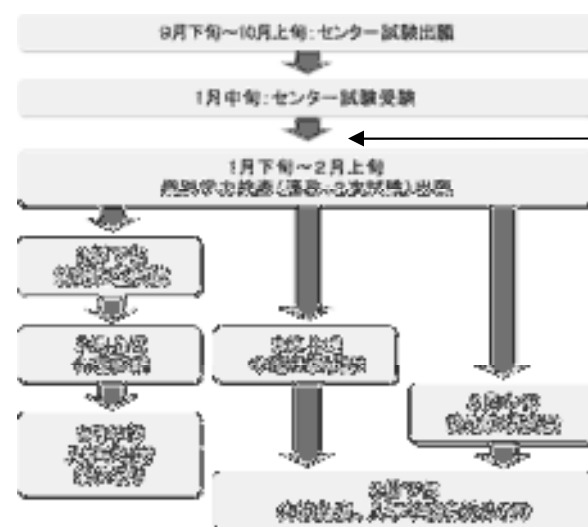
Q4 国公立受験者または私立大学受験者がセンター利用入試を受ける場合、センター試験後、大学入試センターから試験結果(点数)を教えてもらい、出願する大学を決める。 → (×)

Q5 国公立大学は、2 次個別試験は前期日程、中期日程、後期日程とある。
中期以降は前期日程の結果が分かってから出願する。 → (×)

POINT 1-① センター試験と 2 次試験の合計で合否が決まる！！

国公立大では原則として、1 月に行われるセンター試験と、2～3 月に大学ごとに行われる 2 次試験の合計点で合否が決まる。2 次試験は「前期日程」と「後期日程」、そして「中期日程」（一部の公立大のみで実施）の組み合わせで、最大 3 回の受験が可能だ。ただし、前期日程で合格し入学手続きをすると、後期日程（中期日程）を受験しても合格できない仕組みになっているため、**第 1 志望校は前期日程で受験するのが基本**だ。なお、前期日程と後期日程の募集人員を比較すると、前期日程の比率が高く、後期日程は難関大を中心に廃止・縮小の傾向が続いている。

<国公立大学入試のスケジュール>



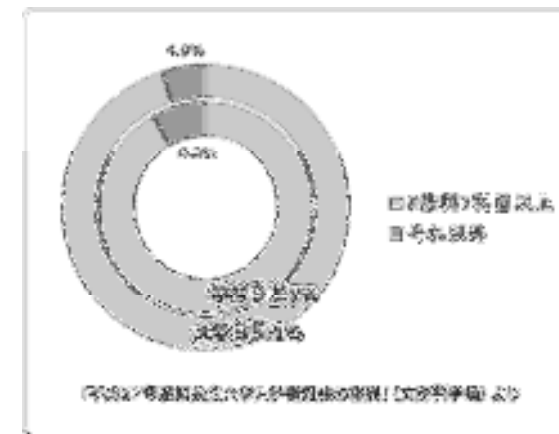
センター試験終了後の翌月曜日に、常盤高校で、自己採点をする。自己採点結果をベネッセ・予備校等に送り、その週のうちに合格可能性が戻る。それらの結果も踏まえて、出願する学校を決定。

* 出願は、自己採点結果から得られた合格可能性を参考にし、前期・中期・後期いずれも 1 月下旬～2 月上旬にかけて出願する。
(前期が不合格になってから次の受験大学を決定するのではない)

POINT 1-② センター試験と 2 次試験の配点比率は、大学によって異なる！！

センター試験では 5 教科 7 科目以上を課す国公立大が約 7 割に上る。特に国立大では 5 教科 7 科目以上を課す大学の割合が 9 割以上であるため、早めの対策が重要となる。

また、国公立大の一般入試の合否は、センター試験と 2 次試験の合計で決まる。ただし、どちらの点数を重視するかは、大学・学部によって異なる。3 年生になると、センター試験と 2 次試験のどちらの対策をより重視すべきか、受験戦略にも影響が出てくるため、志望校の配点比率は事前に把握しておくことが大切だ。



<参考> 県内の国公立大学の配点比率の一例

たとえば、同じ工学部ですが…。

①新潟大学工学部機械システム学科(2015 年度入試) の場合

センター	…国	100	地歴公民	100	数ⅠAⅡB	200		
			理科(専門×2)	200	英語(Lis 含む)	200	計	800点
2次(個別)	…数ⅠAⅡBⅢ	300	物理(基礎+専門)	200				
			英語	200			計	700点
センター：2次 = 800：700 満点 1,500点								

②長岡技術科学大学工学部(2015 年度入試) の場合

センター	…国(古・漢を除く)	100	地歴公民	100	数ⅠAⅡB	200		
			理科(専門×2)	200	英語(Lis 含む)	200	計	800点
2次(個別)	…数ⅠAⅡBⅢ	150	理科から1(基礎+専門)	150			計	300点
センター：2次 = 800：300 満点 1,100点								

すべての科目が大事なのは間違いのないのですが、この場合は、割合でみると「長岡技術科学大学の方が新潟大学よりもセンター試験がより重視される」と考えて間違いありません。

PART 2 私立大学 受験の仕組み(AO 入試・推薦入試を除く)

POINT 2-① 3教科が基本！！配点は大学・学部・学科によって異なる。

私立大の一般入試は、3 教科が基本。文系学部では英語、国語のほか地歴・公民や数学から 1 科目選択、理系学部では英語、数学、理科というパターンが一般的だ。

配点は大学・学部・学科によってさまざまで、全科目同じ配点の場合もあれば、特定科目の配点を高くしているケースもある。出題形式はマークシート方式と記述式があり、大学・学部・学科によって異なる。
早いうちに把握しておくこと。

(うらにつづく)

POINT2－② 方式や日程など私立大学はバリエティー豊富！！

私立大入試では、主流の3教科型の入試をはじめ、得意科目など特定の科目の配点を高くして合計点を算出する方式、センター試験の結果を利用して可否を決める「センター試験利用入試」、全学部・学科が同一の問題を使って同じ日に試験を行う「全学部日程入試」など、バリエティに富んだ入試が実施されている。試験日が異なれば、志望する学部・学科を複数回受験できるため、受験機会を増やせるメリットがある。

<参考> 入試方式の特徴

センター試験利用入試	全学部日程入試	地方試験
センター試験を受験するだけで、複数の大学・学部へ出願できる。4～5教科を可否判定に利用する私立大もある。募集人員が少ないため、高倍率になりやすい。	学部ごとに個別で行われる入試とは日程が異なるので、受験のチャンスが増える。一度の受験で複数学部・学科に合格することも可能。	主要都市に試験会場を設けて行う入試。大学所在地以外で受験できるので、交通費や宿泊費などの費用が抑えられる。また、本学試験と併願が可能なケースもある。

POINT2－③ 入試科目が少ないと高倍率になりやすい！！

私立大の一般入試にはさまざまな方式があるが、なかには2教科や1教科で受験できる大学もある。受験生にとっては科目数の負担は減るが、その分、3教科の方式と比べ定員が少ないことも多く、高倍率になりやすい。また、自分がこの科目は苦手で他の科目は得意だから、という理由で受験する場合も注意には、注意が必要。同じような受験生が集まる傾向が強いので、その中でさらに高得点を取らなければならない。

とある大学では、英語1科目の受験方式があったが、英語が得意な生徒ばかりが受験したため、合格最低得点が9割以上になったという例もあったほどである。

早い段階から勉強する科目を絞ってしまうと、志望校選択の幅を狭めてしまうことにもなるため、科目の絞り込みすぎには注意が必要だ。

<参考ウェブサイト:benesse マナビジョン → <https://manabi.benesse.ne.jp/>>

予告 次号の「Fly high」

ベネッセ7月模試から、「志望校判定」ができるようになります！！
したがって、次号では受験科目の調べ方を中心に解説します。

乞う、ご期待！！

シリーズ連載 **かしこい消費者としての学校選び 第3回 ～ 就職率の意味 ～**

就職率は学校を選ぶ時に気になる数字ですね。もちろん、学校のパンフレットでもよく「就職率99%」などという数字をみかけます。この数字に嘘はたぶんありません。でも、数字のからくりがあることは知っておきましょう。

普通に考えると、就職率99%というのは、

【 学生 100人 】 のうち 【 就職できた人 99人 】 で 【 99% 】だと思ってしまうがちですが、そうでない場合もあります。計算しやすいように極端な例を挙げれば、

【 学生 100人 】－【 就職活動をやめちゃった人 10人 】＝【 就職活動を継続した人 90人 】で、この90人のうち 【 就職できた人 89人 】で、【 99% 】 という計算をすることも可能で

す。この例の場合だと、**実際には11人もの人が就職できなかったこと**になります。でも、就職率99%という数字は嘘ではないことになります。

次は簡単な話です。たとえば、情報関係（コンピュータとか、SEとか）の専門学校だとしましょう。（どの学校か、という話ではありません。あくまで例です。）

普通に考えると、就職率99%というのは、

【 学生 100人 】 のうち 【 コンピュータの業界に就職できた人 99人 】 で 【 99% 】だと思ってしまうがちですが、そうでない場合もありますよね。

【 学生 100人 】 のうち 【 職種は問わないけれど就職できた人 99人 】 で 【 99% 】という数値を出すことも可能です。実際そういう情報を大々的に宣伝するかどうかは別として。

と、いうより、こういう数値を宣伝に使っている学校は少し疑ってかかった方が良くかもしれません。専門学校の場合とくに大切なのは、就職率よりも「業界就職率」ですからね。

つぎによくあるのが、「卒業生全体で100社以上の合格内定を獲得！」みたいな宣伝です。これも、決して嘘ではないのだろうけれど、数字のカラクリが潜んでいることがあります。普通に考えたら、

【 卒業生100人 】のうち 【 1人1社の内定 】で 【 合計100社の内定 】 です。でも、そうではない場合も考えられます。これまたわかりやすいように極端な例を挙げて計算をしてみましょう。

卒業生100人のうち、10社の内定をもらった優秀な人1人。5社から内定をもらったちょっと優秀な人4人、2社の内定をもらった人20人、1社だけ内定をもらえた人30人、**内定の合計数は100社になるけれど、内定をもらった人は55人。つまり45人は内定をもらえなかった人**という計算になります。

極端なたとえ話とはいえ、この計算でも卒業生全体で100社の内定！という宣伝に嘘は無いことになります。内定なんて5社もらおうが、10もらおうが、就職できるのは1社です。体はひとつだから。なので、この数字（＝「のべ人数」と言います）は実情を詳しく調査する必要があるでしょう。

数字は人を説得するのにとてもすぐれた力を発揮しますが、見方や読み方を身につけていないと、その力にたやすくだまされてしまいます。数字の本質を見抜く力は身につけておきたいですね。